



伝承される歌舞伎



都立富士高校 青山 日菜子

江戸時代から伝わる古典演劇のひとつ、歌舞伎。昔も今も多くの人々に愛され続け、今日まで脈々と受け継がれています。歌舞伎は、どのように、どのような思いと共に次世代へと継承されるのでしょうか。この度とても貴重な機会をいただきまして、日本芸術振興会で歌舞伎をご指導なさっている中村時蔵さんと研修生の方々のお稽古を見学し、お話をお伺いさせていただきました。

まず第一に現代における歌舞伎とはどのようなものなのか、現代の歌舞伎界における立女形の第一人者でいらっしゃる中村時蔵さんは、「高度な演技」であるとおっしゃいました。普通の演劇では作品を一からつくるのに対し、歌舞伎は昔からあるものを伝承していきます。お客さんにその作品の世界観を見せるという点について、現代に生きる誰一人として、歌舞伎で演じられる時代を目にしたことがある人はいません。そのため、お客さんに演技を通してどのような時代であったのか実感してもらえるような表現が求められます。また、歌舞伎には演出家という役職が存在しません。稽古を進める中で主役の役者さんが決めたことに周りの人たちが合わせ、作品をつくりあげるそうです。この合わせる、ということは、座組の皆がある程度のレベルにあるからこそまとまることができるのだと、中村時蔵さんはおっしゃいます。

お稽古を見学させていただく中で、ひとつ気になったことがありました。研修生の方が台本の読点に従い台詞の途中でひと呼吸おいた際、「自分の耳には間のない台詞が残っている。間がない方がテンポが良い」との助言があったのです。この台詞回しは中村時蔵さんが過去に同じようにご自身の師から指導されたものなのかと思い、お尋ねしたところ、驚きのお答えをいただきました。歌舞伎の家に生まれた中村時蔵さんには、研修生にとっての現在のご自身、つまり歌舞伎の指導をしてもらう先生や師匠がいなかったのです。「5歳の頃から歌舞伎に関わり、長年に渡って見て、聞いて、培ってきた経験こそが自分にとっての土台である。研修生にはこれを教えている」とおっしゃる中村時蔵さんはお稽古の中で、緩急のある面白い芝居に大切なリズム感、マイク無しで客席中に響かせるための発声方法、さらに個人個人の化粧についてまで、実に様々なご指導をなさいます。師に教わることなく自ら掴み取った努力の結晶を、今度は師の立場となり研修生に伝授するのは、日本が誇る伝統芸能の伝承と振興のために他なりません。

日本の文化を想う熱い心と共に受け継がれる歌舞伎。目には見えずとも舞台上の何もかもに確かに宿るその心を意識しながら鑑賞すると、より一層歌舞伎に魅せられることができるのではないのでしょうか。